

仮面と欲望

中村真一郎



仮面と欲望

中村真一郎

江苏工业学院图书馆

藏书章

仮面と欲望

一九九二年五月一五日 初版印刷
一九九二年五月二五日 初版発行

著 者 中村真一郎

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

©一九九二 検印廃止

Printed in Japan

ISBN4-12-002120-3

仮面と欲望

第一信 男から女へ

昨夜、あなたの社交クラブの片隅で、ぼくがあなたに依頼した事柄は、いささかあなたを驚かせたようですね。

ぼくがその奇妙な依頼についての理由の説明を求められ、さて、ぼくのなかではかなり入り組んでいて、しかも根の深いその動機を、どうやって昔なじみのあなたに判るように話そうかと、考えの糸口を頭のなかに探りはじめていた、丁度、その時に、当の依頼に関係のある、あの白髪のおーケストラの指揮者と、少年のピアニストとが部屋の入口に姿を見せたので、ぼくの思考はかき乱され、そうして席を立ててしまいました。

ぼくはあなたから、受付のところまで春外套を受けとりながら、今朝、早く広島へ発つこと、そうして今日はこちら泊りになること、だから丁度いい、ぼくの欲望の現場から距離をへだてた場所、ゆっくりと自分の突飛な依頼の動機について、考えを整理し、あなたに書き送ることにしましょう、と口早に小声で囁いて、エレベーターに滑りこんでしまいました、その約束を果たすために、今、はじめて泊った、この現代風のホテルの天井の低い部屋で、備え付けの便箋に、告白めいた文章を書きはじめることにします。

奇妙なことですが、ぼくはあなたに一度も語ったこともない、またあなたも長い年月のあいだ、一度も訊こうとしなかった、ぼくの亡妻のことからはじめなくてはなりません。

と、書くと、あなたはぼくと妻との生活にぼくが生理的に不満を感じつづけてきた、その結果が、今度の提案となつて現れたと、常識的な解釈を直ぐ頭に思い浮べ、それでは日頃のぼくにも似合わない有り触れた動機だと、忽ち打ち消すことでしよう。あなたがこの十数年のあいだに知つたぼくの精神構造は、もっと別な「オリジナル」な、——とあなたなら言うだろう理由の伏在を想像させるでしようから。

そうです、もう半世紀も昔のことになるが、長い戦争中、あなたも入っていた、あの兵舎のような古く粗末な木造の結核療養所から、ぼくが敗戦直後の一種の精神錯乱のなかで脱出し、軍医だった男で復員したばかりの昔の仲間を頼つて、九州の南端の、彼の父親のやつてゐる病院へ逃げこみ、やはり別の仲間の廻してよこした社会学の本の翻訳をやつたりして、毎日、南方の明るい海を眺め暮しているうちに、奇蹟的に精神も肉体も回復してきた。そして戦争に生き残つた仲間たちが東京ではじめた、あの経済調査機関が軌道に乗つたので、ぼくも誘われて上京し、我儘な勤め人生活に入つたのでした。そうして三十歳の年に、ごく平凡に生活上の便宜から、同じ勤め先の同じ齢の女子所員と同棲をはじめ、いつの間にか正式に結婚すると、やがて彼女は退職しました。戦争の終つたあと暫くは、世間によく見られた組み合わせだったわけです。あなたとパリで再会するまでに、ぼくはそんな平凡な経歴をつんでいたのです。

そのようにして始つたぼくたちの結婚生活、はじめは知り合いの家の板敷の廊下を仕切つて、

そこを仮りにひと間きりの新所帯にして出発した生活は、その今にも崩れそうな、焼け跡に建てた古い二階建て洋館に、五家族もが詰めこまれている有様でした。勿論、台所は共有、冷蔵庫などはなし、風呂は燃料もなかったし、浴室は物置になっていて、時間に追われての泥水のような銭湯通いという有様。

その頃は夫婦の給料を合せても、インフレの進行速度に追いつかず、アルバイトの翻訳で稼ぐにも、狭い廊下の仮部屋は夫婦が抱き合って寝るだけで一杯で、枕もとの蜜柑箱を机にして、何とか原稿用紙を拡げても、直ぐに停電になるという始末でした。全く今からでは想像もつかないし、境遇も年齢も異うあなたは遂にそういう経験はしないで済んだのでしょうか。

ぼくたちは絶えず他人の眼を意識して暮していることに耐えきれず、時々、勤めの帰りに、皇居前広場の、足の踏み場もないほど横になって折り重なっている恋人たちのあいだに隙間を見つけて、周りが皆、知らぬ者同士の無遠慮さから、芝生のうえに時を忘れて、妻とふたりだけの感覚のなかに没入したものです。

それは愛とか快楽とかいうような、余裕のあるものではなく、追いつめられた野獣の最期のあがきに似ていました。

毎日の食糧、季節の変化に伴う衣料、それから何度かの追い立てを食ったり、うまく部屋が見付かったりでの引越しなどに追われて、ぼくたちはお互いの愛を確認する暇もなく、いや、それも、そもそも同棲の動機に、愛情があったかどうかと振り返ってみる暇もないままに、いつか二人とも四十歳となっていました。妻は最初の妊娠中に、買出しの途中の満員列車のなかでの立ち

づめ、押されづめの無理がたたって流産したので、子供のできない身体になっており、そして、ようやく生活にもゆとりができたその後の十年ほどは、どうやら人間らしい暮しのなかで、ぼくたちは二人きりで向きあって、夫婦というものの、お互いの人生のなかでの意味について、反省してみる時間を見出すことになりました。

そうしてぼくが発見したのは、激しい愛によるのでもない、時の勢いに押し流されてのような同棲生活——そうです、彼女は最初はぼくたちの研究所のスプリングの壊れた古いソファのうえで、毎晩、同僚たちの帰ったあとに眠るという不便な生活が続けていたのです。それに耐えきれずに、ぼくの廊下を仕切った部屋がまだしもということだけで、ぼくのとこに住みつくことになったのですが、それもそもそものは彼女は戦争未亡人の妹と、狭いひと部屋に暮していたのが、その妹に占領軍の米軍兵士の愛人ができた、つまり当時の言葉でいうと「オンリー」という専属の娼婦のようなものにその妹がなったために、彼女は同じ部屋で大っぴらに戯れるその兵士と、肉親の妹との痴態に耐えられずに、追い出されたのだった——そうした動機と、戦争直後の、今日では想像もつかない、あの当時の男女の性への利根的な、半ば絶望的な、欲望の満足のなかに現実の不安と不満とをひと刻忘れようとの追いつめられた衝動の、一般的流行のなかではじまった、ぼくと彼女との男女の関係は——セックスに関して、そのような切実な反応を呈していた時代が、ぼくにあったなんて、あなたは信じられないでしょうが——平常時における結婚生活が心と肉との自然な融合を前提としているのに対して、肉の繋りは気紛れな一時的なもののつもりで、いつ何時でも別の事情が発生したら、その日から何の厄介もなく、平然と別れられる感じで

お互いいたし、その無責任さが却って、毎晩、明日知れぬという予感を掻き立てるといふ逆効果となつて、激しい愛欲に似た様相を呈していました。

一方、心の繋りの方は、これは同じ年齢であり、似た精神的経歴を経て来たことから、仲間としての親愛感、共通の友人たちを持つ者同士の男女を超越した友情と、仕事の同僚に対する気易さとが中心となり、新婚夫婦特有の甘美さというような新鮮な感覚は、お互いに知りませんでした。こちらの方は、あなたも感情移入が可能でしょう。

つまり、はじめから、長い生活習慣のなかで馴れ合った同士のように、気心の知れた関係だったのだから、流産をした予後、暫く性的交渉を禁じられた時など、彼女はごく気軽にぼくに向つて適当な欲望の処理をすすめたものでした。若い男性が不自然な禁欲状態によつて、精神的リズムを乱すのは無意味だし、仕事にとつても有害だというのが、その理由で、それを口にするのに、彼女は自分に遠慮しないという、理解ある妻の態度というより、親しい友人としての勧告という、ひどく割り切った感じでした。

ところが、その彼女のすすめに従おうとして、その頃都心の国電の駅前広場に群れていた、頭をスカーフで包んだ街娼たちのなかに入つて物色をはじめたぼくは、そのひとりから妙に事務的な声を掛けられた途端に、思わず身を退いて駅の構内へ逃げこみ、そうして自分のなかに全く欲望が芽生えていないことに気付きました。そうして奇妙なことには、部屋に戻つて、足もとに台所道具など並べた、狭くらしい寢床に電気もつけずに横になつてゐる、化粧もしないで老婆のようないかつい表情で眼を閉じてゐる病人の彼女に対して、突然に情欲の突き上げてくるのを覚

え、彼女の毎月の例の期間中にやってくれる手段で、その欲望の解放を彼女に求めたものでした。その思いがけない経験が、ぼくに自分はいつの間にか、この女に対して性的に固着してしまっているなという、無意識的な事実を発見させたのです。現在のぼくからは想像もつかないでしょうが。

この発見は、人類は動物の一種であり、その雄は本能的に雌によって性の満足を求めるものであるが、その対象は常に同一の雌でなければならぬという、生理的な必然はなく、また一夫一婦制の道徳には、家族制度を維持するための便宜以上の、倫理的価値は歴史的に存在しないと、少年時代以来の唯物史観の影響で思いこんでいたぼくには、甚だ新しい心理的経験だったわけです。

それは男女はある期間、共同生活を続けることにおいて、性的にも相手に対する特殊な趨向が生じ、他の相手には拒絶反応を起すようになり、そこに道徳に似た抑圧の習慣が発生するらしい、という事実、ぼくのような少年期以来の思想的経歴の人間にとっては、まことに奇妙な事実、の確認でした。笑わないで聞いて下さい。本当の話なんだから。

ところで、この習慣的な反応は彼女の方には、より美しい形で発生しました。四十歳を過ぎて、暫くして、ぼくは激しい神経障害に見舞われ、三年間ほとんど勤めを休んで、休養生活に入りました。すると、一時、勤めを退いていた彼女は、再び旧職に復帰し、数年間の空白を忽ち取り戻して、有能な調査員となったばかりか、週末ごとには、ぼくの休養先の辺鄙な温泉宿に訪ねてきて、部屋に籠って壁ばかり睨んでいるぼくを強引に山歩きに誘い出してくれ、その間、性的不能にお

ちいていたぼくにつき合って、生理的に最も欲望の強い年代を、彼女は禁欲生活を維持したのです。あなたはそうした彼女の禁欲を愚かしいと思うかしら。

しかし、ぼくにとって、単なる情性的習慣となっていた結婚生活は、彼女にとっては、それを守り育てることが、人生の理想であるという、倫理的信念にまで昇華しているように見えません。

その頃、毎週、食欲の病的に失われていたぼくのために好物を携えて、土曜日の夕方ごとに土埃の立つ田舎の街道に停ったバスから、軽装で勢いよく降りてくる彼女を出迎えながら、ぼくはベートーヴェンのオペラ『フィデリオ』の女主人公を何度も思い出して、不思議な感動に捉えられたものでした。あなたは疑わしそうな顔をしそうですが、四十歳のぼくには、そうした素直さが残っていたんです。

その頃、ぼくは例の思弁癖から、近代の代表的な小説家が、誰も彼女のような見事に貞潔な妻を扱った小説を書いていないのではないか、と思いつき、その理由は十八世紀以来の西欧における女性の精神的解放は、支配者である男性から女性の精神に対して強制的にはめられた貞操帯である、ひとりの男性にのみ、その肉体を捧げることが神聖な義務であるという観念を、抛棄することから始ると、すぐれた作家たちが考え、それが『アンナ・カレニナ』や『ボヴァリー夫人』となったのだ、と素人なりに納得しました。つまり現在のあなたの信念と同じことです。

それらの不倫を扱った傑作に比肩するだけの、貞操を美德とする小説には、十七世紀のルイ太陽王の宮廷生活のなかに生れた『クレヴ公妃』があると、あなたは言うでしょうね。だが、あ

の貞潔な物語を書いた伯爵夫人も、公然たる愛人である『マクシム』の著者の裸の腕のなかで、何度、自分の幻影の作り出した女主人公の美徳を羨んだろう、と皮肉っていた、現代の批評家の文章を思い出して下さい。あの『読者の歴史』とかいう本をバリでぼくに手渡してくれたのは、あなただったのだから。つまり、ルイ十四世の治下においても、あの小説は流行の性風俗のなかで、滅多に見られない例外として、読者に迎えられたのだというわけです。

そう考えると、ぼくの妻の場合のような、自ら望んでの貞潔さというものは、現実のなかでも実に珍しいということになり、しかもぼくたちの結合の出发点が、恋愛による永遠の愛の誓いというようなもので始ったのではなく、——ぼくは本気で言ってるんです。笑わないで——それが単なる生活の便宜から来るなし崩しの同棲であつたわけですから、愈々彼女のぼくへの専念は高貴とさえ感じられてきたんです。ぼくでも、高貴というような言葉を使う時には使わんです。

その頃、研究所の同僚の統計専門家が、戯れに作成した三十代と四十代の人妻の浮気の調査の結果をグラフにして見せてくれましたが、それによると、九州のある都市では、浮気曲線が何と七十パーセントの高率を示していて、ぼくたちはこの数字のなかには、厳密な実行だけでなく、人妻の虚栄心による幻影や願望も反映しているに違いない、と笑い合ったものでした。

ぼくが言おうとしているのは、そうした時代の風潮のなかで、ぼくの妻が単に生理的に禁欲生活を守っていた、ということではなく、又、経済的な働き手と主婦との二重の役割を引き受けて、不平も言わずに努力を続けてくれた、ということさえもないんです。あなたは日頃のぼくがこういうことを言いだすと、またもや俄かには信じられないと眉をこすってみせるかも知れないけ

れど、彼女の精神からは、一種の眼に見えない放射能のようなものが放出されて、それがぼくの心を暖かく包んでくれる、その不思議に安らかな手応えが、さしも深刻で厄介なぼくの奥に宿る神経症の固まりを、次第にやわらかに溶かしてくれて行った、その過程が、ぼくには神聖な愛情というような、それまで存在そのものをも予想してみたこともない感情のなかに、ぼくをひたしてくれた、ということをお願いしたいのです。高貴のあとに、今度は神聖です。今夜のぼくは特別なんだと思って、ぼくの言葉を丸ごと呑みこんで下さい。

あの執拗で強迫的な神経障害、——ぼくの精神を崩壊させた、発狂状態とも、視覚や聴覚の恐るべき異常による、日常生活の全くの不可能さの連続ともいえる時間——テレビの画面は滝のように流れ続けるか、人物が枠から飛び出して襲いかかってくるかするし、ラジオは音を最低にし、ぼっても不安に胸がしめつけられ、電話のベルはぼくの口から悲鳴を生れさせ、人と向い合っても、一分もすると耐えられなくなって、追いついて立てられるように部屋から遁れ出してしまう。更には眼が覚めたままで、まるで夢のなかのように、ぼくは道を歩いていて、突然に自分がどこか別の場所の見知らない公園のベンチに坐っている若い女に変身しているのを感じる。あなたには想像もつかないでしょうが、そういう時、中年のぼくは眼のまえに立っている、現実の大きなビルディングと二重写しのようにして、その知らない若い女の足もとで、餌をひろっている鳩の姿も見えていたのです。

そうした廃人となったぼくを、あの慢性的な地獄から引き上げてくれたのは、昔の仲間の精神科の医者、精神分析でもなく、過激な実験的な脳に加えられた電気衝撃でもなく、ぼくの妻のま

ぎれもない、強く純粹な愛でした。

あの疑いような愛が、ぼくを社会に復帰させると共に、長い不能からぼくを回復させてもくれました。当時のぼくは彼女以外の女性とは肉の交渉は生理的に不可能だと無意識のうちに信じこんでいたから、日常生活を取り戻したあとも、自然と他の女性に対して欲情を惹き起すことはなかった。同僚は浮気に誘っても仲間入りしない、ぼくが、病氣からまだ充分に回復していないのだからと誤解し、若い娘と遊んで能力を取り戻さないと、女房に家を出て行かれてしまうぞ、と半分、真顔で忠告してくれたものでしたよ。

それが思いもよらない、真冬の夜中に、酔って帰ったぼくは、寝衣のままトイレのなかで倒れている彼女を発見し、救急車も間に合わずに永訣となってしまった。そうして再びはじまった人格の崩壊とそうして神経症の再発の予徴。ぼくは毎日、波間を漂うような不安な日々を過していた。その時、例のオランダに本部のある国際企業の日本進出が決り、その企画グループがデュッセルドルフに出張所を開いてぼくに口を掛けてきて、それであの五十歳になつてのぼくの不便なドイツの都市での独身生活となり、それがまた思いがけなくもある女性とのパリでの再会というドラマも生んで、そうして十数年、今度のあなたへの相談となったわけです。

と、ここまで書いて顔をあげると、カーテンを閉め忘れてあつた窓枠の向うに、深夜の都会の灯火がばら撒いたように光っているのが眼に入ってきました。すると、急にまだ五十代だったぼくが、あのドイツの復興都市から出張を名目に出てきたパリのホテルで、しめし合せたある女性の到着するのを待ち焦がれながら、古い煉瓦の屋根の向うに拡がっている街の灯を見つめていた

時の、若々しい心の弾みを思い出します。そうして不意にぼくの顔の近くには、あの頃のその女性の豊熟しきった肉の匂いが漂ってくるのが感じられてきたので、ここでペンを置くことにします。

実は明日から三日ほど、名古屋泊りになることに決ったので、このあとは明晩、書き継ぐことにしましょう。約束の提案の内容には、全然、触れないまま、前提の方にスペースを取られてしまったので、委細後便。

三月某日 広島のホテルにて

第二信 女から男へ

ああ、驚いた！ あなたのような正直な偽善者、見たことはありませんわ。

日本へ帰ってからはじめていただいたお手紙のなかのあなたは、ふたりだけでお逢いしている時のあなたとは、全くの別人なんですもの。読みながら何度も考えこんでしまったわ。

本当にこれを書いたのは、あなたかしらって。用心深いあなたは文末にも封筒にも、どこにもお名前も記していないのね。そうして、終りのところで、チュールリッヒから出て行くわたくしを待っていた時のお気持ちを思い出しながら、わたくしのことを「ある女性」ですって。いやな方。名無しの女の「肉の匂い」などを鼻先に、記憶のなかで甦らせるなんて、本当にあなたはお器用ね。

それにしても、今度、はじめて気が付いたのだけれど、あなたからお手紙いただくの、十年振りのよね。そうして日本へ帰ってからの十年間で、完璧にあなたは、あんな素知らぬ顔の偽善者の仮面を作りあげてしまったのかしら。それが日本の風土^{クニツチ}というものかしら。

本当に見事に他人行儀なお手紙だったわよ。あれなら、クラブの事務の手違いで、会長の机のうえに配達されて、秘書の眼に触れても、誰もあなたとわたくしとの長い秘密のおつき合いには気が付きはしないわ。

あなたはそっかし屋のわたくしが、書きかけのこの手紙をクラブの事務机のうえに置き放しにして、他人の眼にとまり、会長の耳に入りはしないと、ひやひやしているんでしょう。

でも大丈夫よ。ここは青山のクラブでも、赤坂のわたくしのお部屋でもないの。眼をあげても、窓の外にあるのは、あのクラブのヴェランダを覆っている、ロココ時代の女性のスカートを膨らませた鯨の骨で作ったという、アーチのような前衛彫刻でもないし、お部屋から覗ける双子塔のふたつ並んだ、羊カンのようなビルでもないわ。

そうよ、夢のように満開な桜の梢なの。どこだかお判りになって？ 会長の箱根の別荘じゃないわ。あそこにはまだ春は訪れていない筈。だから焼もちをやくふりはご無用よ。

苛^じらさないでって？ ええ、ずばり、病院のベッドのうえなの。びっくりしたでしょう。でも、ご心配なく。心臓発作でも、脳の血管が破れたわけでもなく、ほんの外科なの。だから、ベッドのうえに上半身を起して、こうして書いていられるのですもの。

外科だなんて、はねかえりの小娘みたいでしょう？ いや、やっぱり老化現象に、遂にわたく